

Title	プーシキンの詩『英雄』論
Author	浅岡, 宣彦
Citation	人文研究. 44 巻 2 号, p.43-58.
Issue Date	1992
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部
第44巻 第2分冊 1992年 17頁～32頁

プーシキンの詩『英雄』論

浅岡 宣彦

1

この作品の創作にはひとつの事件が関連している。それは1830年9月29日に、ニコライ一世がモスクワを訪問した事件である。当時、モスクワはコレラが猖獗をきわめ、国民の志気を低下させていた。皇帝は国民の低下した志気を高めるために、コレラの蔓延した首都を訪れ、当時の人々に英雄的行為として歓迎されたようである。プーシキンも当時モスクワから遠く離れたボルジノに足止めをされ、モスクワに住む婚約者ナターリア・ゴンチャローヴァの身を案じつつ、次々と作品を産み出していた。彼が情報源として読んだ唯一の新聞は「モスクワ報知」であり¹⁾、10月1日付けの「モスクワ報知」には、「モスクワ。皇帝陛下は9月29日真夜中11時にサンクト・ペテルブルグから当地の首都に御光臨された」と記されてあった。皇帝は一週間以上滞在し、10月7日に首都ペテルブルグに戻った。10月9日付けの「モスクワ報知」に掲載されたポゴージンの記事は当時の人々の一般的感情を示すものであろう。「この様に、彼（皇帝）が重要で非常に困難な職務の間をぬって、とりわけたえず皇帝の注意を引きつける現今のヨーロッパの政治情勢にも拘らず、モスクワのために割いた一週間は、彼の生涯にとってマイナスにはならないであろう。モスクワの人々はこの一週間を長く記憶にとどめ、父親たちは感謝の気持ちをこめて祖国の祭壇に捧げられたこの高潔な犠牲について子供たちに語るであろう。そしてそれは数多くの成功、勝利、偉業よりも後世の人々のもとに届くだろう。」²⁾ この記事が詩の創作の契機になったことは間違いない

いであろう。この記事がプーシキンの手元に届いたのは10月18日—20日頃とされる。プーシキンは10月20日には短編小説『吹雪』を完結し、その余白に「10月19日、第十歌を焼却」と記しているが、後に復元された第十歌の断片には詩『英雄』と類似の詩句が見られる。その詩句は1824年に書かれた未完の詩『不動の番兵は王室の敷居でまどろんでいた』にも見られるもので、従来のプーシキンのナポレオン観を反映していると見ていいだろう^③。プーシキンは10月末か11月始めにモスクワのポゴージン宛に詩『英雄』の原稿を書き送っているので、詩『英雄』の創作の時期は10月下旬とみて間違いない。初めに、詩の大意を記しておく。

英雄

真理とは何か？

友人

確かに、栄光とは気まぐれで移り気なものだ。

舌の形をした炎のように、それは

選ばれた人々の頭上を飛び回り、

今日、一人の頭上から姿を消したと思うと、

もうすでに他の頭上に姿を現す。

新しいものを従順に追い求めるのは

愚かな民衆の習い。

しかし我々にとって神聖な額とは

舌の炎がぱっと燃え上がった額ではないか。

玉座において、血塗れの戦場において、

その他の分野で成功している者たちの、

これら選ばれた者のうちで誰が一番

君の心を捉えて放さないのか？

詩人

それはいつも、いつもあの男、一あの戦いの新参者だ

その男の前に皇帝どもは鳴りを静め、

自由によって王冠を授けられたかの軍人

朝焼けの影のように消え去ったあの男だ。

友人

一体いつのことか その男が不思議な運命の星で
 君の頭脳を驚嘆させているのは、
 アルプスの山々から聖なるイタリアの台地を
 彼が俯瞰しているときか、
 それとも軍旗を、あるいは独裁者の笏杖を
 手にするときか、それとも
 あたり一面に遠方に飛ぶような戦火を
 導いていくときか
 勝利に次ぐ勝利が彼の頭上を
 飛びすぎていくときか
 それとも巨大なピラミッドの前で
 拍手喝采で軍隊が英雄を迎えるときか
 それともモスクワが人気もなく輝き
 彼を迎えて、一押し黙っているときか？

詩人

いや、幸福のふところに抱かれたときでも
 戦場においてでもなく、私が彼をみるのは
 皇帝の娘婿として玉座にあるときでもない、
 またあそこでもない、巖のうえに
 座り、無聊の処刑に苦しめられ
 英雄とあだ名されて笑い者とされ、
 軍隊用の外套に包まれて
 ひっそりと消えていく彼でもない。
 私の目の前にある情景はそれではない。
 長い長い一列の寝床が見える。
 そこには生ける屍が横たわる。
 病気の中の女王、強力なペストに
 烙印を押されて… 彼は
 戦場の死には囲まれずに
 眉をひそめて寝床の間を歩き回り
 冷ややかにペストの手を握りしめ

消え果てようとする脳裏に
勇気を呼び起こす… 天にかけて
誓う、自らの生命を
暗い病のまえに危険にさらし、
消え去った眼差しを励まそうとする者は
誓って言う、その者は天の友となろう
盲目の地上の判決が
いかなるものであろうとも…

友人

詩人の空想よ—

厳しい歴史家がそれらを追い払う！
ああ、彼の声は鳴り響いた*。
世間を魅了した魅力などどこにあらう！

詩人

真実の光明など呪われるがいい。
もしもそれが冷ややかで、妬み深く
誘惑に弱い俗衆に愚かにもおもねるならば！—いや！
無数の下劣な真実よりも私にとって尊いのは
我々の心を高める欺瞞である…
英雄に心を残しておけ！それがなければ
その人物は何者になるだろう？ 暴君…

友人

安心したまえ……

1830年9月29日

モスクワ

* Memoires de Bourrienne. (プーシキンの注釈)

この様に、詩『英雄』は友人と詩人との対話から構成されている。対話形

式の主な詩は『君と僕』(1817-20, 散文作家と詩人), 『官吏と詩人』(1821, 官吏と詩人), 『本屋と詩人の対話』(1824, 本屋と詩人), 『ファウストからの一場面』(1825, ファウストとメフィストフェレス), 『散文作家と詩人』(1825, 散文作家と詩人), 『詩人と群衆』(1828, 詩人と群衆) などがあり, ファウストのモチーフの詩を除けば, つねに一方は詩人であり, 他方は現世的利益を優先する散文作家, 官吏, 本屋, 群衆などで, 両者の間には相互の不理解, 敵意, 葛藤などが見られる。詩『英雄』の詩人と友人は, それに反して, かなり近い関係にあると言えるだろう。この詩はあたかも二人の論争の一断面を切りとってきたようなものであり, 友人は明らかに, 栄光は気まぐれで移ろい易いものだ, という詩人の意見に相づちを打つかのように, 「確かに, (君の言う通り), 栄光は気まぐれで移ろい易いものだ」と語り, 地上の名声の移ろい易さを提起して, 対話を始めている。その点に関しては, 両者の議論は一致しているように思われる。友人はさらに, 無分別な群衆(この表現は『詩人と群衆』の中で詩人が用いている)もまた気まぐれであり, 最新流行の英雄のあとを従順に従うものだが, と語り, しかし君の場合はどうかと詩人に尋ねる。運命に選ばれた者の中で, 王位にあっても, 戦場にあっても, 他の世界的功績の分野においても, 誰が彼の心を支配し, 彼の賞賛と賛美の的になっているのか。詩人は, 「それはつねに彼である, 自由によって王冠を授けられ, 支配者たちがその前に屈服した軍人の成上がり者, そして今は夜明けの影のように消え去った男である」と答える。この時に詩人は, そして作者プーシキンはナポレオンの固有名詞を用いずに, 三人称単数の代名詞 он を用いている。この代名詞は版によって大文字と小文字とがみられるが, これは重要な違いであり, 今後検討を要する問題である⁽⁴⁾。またこの詩では二人の人物(ナポレオンとニコライ一世)が対比され, 真の英雄とは何かが問われているが, 両者はいずれもヴェールに隠されており, ニコライ一世についてはわずかに最後の日付で暗示されているにすぎない。

詩人の回答を聞くと, 友人はナポレオンの偉大さを彼の「軍事的・政治的尺度」に基づいて詩人に質問を重ねていく。いかなる点でナポレオンが詩人の心を引きつけているのか, 何故詩人はナポレオンを英雄とみなしているのか。それは, 制圧したイタリアをアルプスの高みから見下ろした時のナポレオン(1796年-97年のイタリア遠征)か, それとも軍旗(1796年のアルコレの戦い)か, あるいは独裁者の笏杖(1799年11月9日, ブリューム18日)を手にしたときか, それとも足の早い戦火をヨーロッパ各地に送り出してい

るときか、あるいはエジプトのピラミッドの巨像のまえで（1799年7月12日、エンベブでの戦勝）兵士たちが彼を英雄として拍手喝采で迎えたときか、あるいは見捨てられたモスクワが炎上し、無言で彼を迎えたときか、友人はナポレオンの輝かしい「栄光」の数々を挙げていく。それに対して、詩人は友人とは違う観点からナポレオンの英雄たる由縁を説明する。それは友人の「軍事的・政治的尺度」に対して、「道徳的・倫理的価値基準」に基づいたものである。私が念頭に浮かべているのは幸福の絶頂にあるナポレオンでも、戦闘中のナポレオンでも、また皇帝の娘婿（1810年4月、オーストリア皇帝フランツ一世の皇女マリイ・ルイーズと結婚）としての彼でもない。また一人巖の上にすわり、流刑地で静かな回想の日々を送り、英雄と皮肉られながら、軍服の外套に身を包んで、静かに消えていく彼の落日のときでもない。私が念頭に思い描くのは、病気の女王ベストに死の烙印を押され、生ける屍となって兵士が横たわる寝床の列、その間を眉をひそめて歩き回り、死を間近にひかえた人間に勇気を鼓舞するために、沈着冷静にベスト患者の手を握るナポレオンの姿である。詩人は高揚して断言する。

天にかけて

誓う：自らの命を
暗い病のまえに危険にさらし、
消え去った眼差しを励まそうとする者は、
誓って言う、その者は天の友として（永遠に）残るだろう、
たとえ盲目の地上の判決が
いかなるものであろうとも…

ここで、友人と詩人との間に微妙なずれが生じてくる。「栄光」「名声」は気まぐれであり、かつ移りぎなものだという点では二人の意見は同じであった。しかし、詩人の心を引きつけて放さない「英雄」は「いつも彼、いつも彼」（傍点筆者）であり、自らの命を危険にさらして、他者を思いやった彼の人道的行為は一時的な賞賛ではなく、天の（永遠の）賞賛に値するだろう、と詩人は主張した。友人は詩人の感傷的でヒロイックな主張に同意しない。彼は最近出版された「回想録」を念頭において、ナポレオンによるベスト病院の訪問は偽りであり、詩人の信じている伝説は歴史的事実ではなく、詩人の産みだした空想にすぎない、と反駁する。

詩人の空想よー

厳格な歴史家がその空想を追い払う！

ああ、かれの声が轟いた。

世間を魅了した魅力などありはしない！

しかし、詩人は友人の反駁に怯まずに自説を主張する。たとえそれが真実（правда）であったとしても、それが冷ややかで、妬み深く、誘惑に弱い俗衆におもねるようなものならば、呪われてあれ。無数の下劣な真実（низкие истины）よりも我々の心を高め、浄化してくれる《欺瞞》（обман）のほうが自分にとっては尊いのだ、と主張する。友人は、その言葉を聞くと、相手を宥めるように、「安心するがいい」と言って対話を中断した。こうして見ると詩人と友人の対立は詩人の抱いた美しい《空想》と友人の主張した《歴史的眞実》の対立のように思われるであろう。

詩は友人の言葉「安心したまえ」で終わっているが、この語の後に多重点があり、友人の台詞は中断された印象を与え、詩が完結していないように見える。この手法は詩人のロマン主義時代からのもので、彼の創作の写実主義時代にも踏襲されたプーシキンお好みの手法である⁶⁾。「空間の美学」とでも名付けられようか。詩に奥行きと広がりを与える効果と読者との掛合の妙を醸し出す手法と言ってもよい。彼は友人に「安心したまえ」と語らせているが、その理由については読者の想像、判断に委ね、詩人と友人の討論にあたかも読者を参加させようとしているようである。その判断の材料を作者はそつと最後の注釈に忍び込ませる。詩の創作の日付である。これが実際の創作の日付ではなく、作者の作意的日付であることは上述した。この日付はニコライ一世がコレラの蔓延した首都モスクワを訪問し、低下した人心のモラルを高揚させようとした行為を暗示させる象徴的な日付である。当時の読者は勿論この日付をニコライ一世のモスクワ訪問と結び付けて読みとったことであろう。ここで詩人と友人の論争的であったナポレオンはニコライ一世と対比されることになる。過去の歴史上の「英雄」ナポレオンと現代の皇帝ニコライ一世との対比であり、作者の思惑はむしろこの日付のほうに向けられていくのである。何故友人は「安心するがいい」と詩人に語ったのか、何故友人はその理由を述べていないのか、読者は詩を読み終えた後に、そうした疑問に突き落とされるであろう。友人は次のように言いたかったのであろうか。ニコライ一世の行為は、君が誇りとするような人道的行為であり、しかもそ

れは空想でも嘘、偽りではなく、現実の行為である、それは政治的・軍事的にも、人間的にも二つの要素を兼ね備えたような「英雄」の出現なのだ、と。もしそうならば、この詩の一番の狙いは「ニコライ一世」の賛歌にある、ということになる。

3

詩『英雄』には二人の声、詩人の声と友人の声が反映しているが、その他にテキスト外の要素として、エピグラフ、脚注、日付が含まれている。これらの要素の役割は互いに論争する詩人と友人の視点とは異なる《他者の視点》を作品に導入することにある。この作品は多層的、ないしは多声的構造をもつ作品である。この点から作品の意図を検討してみる必要があるだろう。プーシキンの対話形式のテキストの構造に関しては、ロートマンの論文があり、教わることが多い⁽⁷⁾。ロートマンは、プーシキンのロマン主義的テキスト、主観的で独白が中心の南方叙事詩の中にも、言語構造のレベルではなく、韻文のテキストと散文のテキスト（предисловие 序文，примечание 注釈）との間に対話構造が見られることを指摘し、プーシキンの叙事詩を二つのグループに大別している。1）注釈のついた作品、つまり、韻文テキストと散文テキストとの結合から構成されている作品：『コーカサスの捕虜』『バフチサライの泉』など、2）注釈がついていない作品、つまり韻文テキスト部分が叙事詩のテキストと同一のもの、明らかにノヴェルの主題をもった叙事詩『ヌーリン伯』、『コロームナの家』や、ノヴェルの主題と哲学的問題を結び付けた作品『ジプシー』や『アンジェロ』など。叙事詩の韻文テキストがポリフォニー的であればあるほど、その作品の散文の付属物は役割を減じていく傾向が見られる。この詩と散文の対比は「自分のテキスト」と「他人のテキスト」との関係にも応用される。例を『バフチサライの泉』にとると、この作品は古典主義的三部構造：序文＋韻文テキスト＋注釈、を有している⁽⁸⁾。プーシキンはこの叙事詩への序文の執筆を友人のヴァーゼムスキイに依頼し、他者の視点の入った散文の序文と韻文テキストとの対話を実現しようとした。作者は、韻文の詩のテキストと散文の序文、自分のテキストと他人のテキストとの結合した作品構成を重視したのである。その後、プーシキンは友人の序文を取り外し、以後の作品では自分で〈序文〉を書くようになった。プーシキンの意図が十分に友人の書いた〈序文〉に反映されていなかったためであろう。『バフチサライの泉』の注釈は本来の注釈ではなく、

ある旅行者の綴った「タヴリーダ旅行記」からの抜粋を散文テキストの跋文の形で添えたものである。ロートマンは、プーシキンのテキストの多声的構成（韻文のテキストが作品と同一でなく、その一部を構成している）は南方の、ロマン主義の時期に誕生し、後期の成熟した時期にも「初期の創作の知覚と読者への提供」という形で保持されたと指摘している。それはプーシキンの創作に有機的に備わり、1) 《別の》人生観、2) テキスト外の構成を容認する傾向、対話への志向に結びついていった。その後、テキスト外的要素の運命は、二つの方向を辿った⁹⁾。1) ひとつは、предисловие 序文、посвящение 献詞、эпиграф エピグラフ、примечание 脚注、注釈の利用の道が開かれた、2) もうひとつは、『ジプシー』やその後の劇作品への動きとなって現れた。

『バフチサライの泉』を創作した後、南方叙事詩『ジプシー』が創作された。この作品は最終稿で注釈がカットされて出版されたが、その理由のひとつは、ロートマンの指摘の通り、対話構造が韻文テキストの中に移されたからであろう。プーシキンは、ノヴェルの主題を持ち、注釈を持たない叙事詩『ヌーリン伯』を書いた後に、再び叙事詩『ボルタワ』で叙事詩の権利を復活し、韻文テキストと散文の注釈の対話構造を取り上げた。『バフチサライの泉』と『ボルタワ』の構造を比較すると、次のようになる。

『バフチサライの泉』（1821年－1823年）

（他人の書いた散文の）序文＋（エピグラフ）＋韻文テキスト＋散文の跋文

『ボルタワ』（1828年－1829年）

（エピグラフ）＋献詞＋韻文テキスト＋注釈（歴史的コメント）

『ボルタワ』では＜序文＞がとられ、韻文テキストと散文の注釈の対話が作品構造の軸に据えられている。『ボルタワ』の注釈は歴史的コメントの性格を有しており、『コーカサスの捕虜』や『バフチサライの泉』で見られた＜поэзия 詩＞と＜проза 散文＞の対比は、＜поэзия 詩＞と＜история 歴史＞の対比に位相されている¹⁰⁾。ひとつの《伝説》をめぐる、韻文テキストの歌い手である「詩人」とそれを歴史的に注釈しようとする「歴史家」との対立が見られるのである。ロートマンの次の指摘は傾聴に値する。

「叙事詩（韻文テキスト）は主題の詩的 версия（異説）を与え、注釈は歴史的 версия（異説）を再構築する。」

この対話構造（韻文テキストと散文の注釈）は詩『英雄』では詩人と友人の対話に移し換えられ、『ポルタワ』で始められた詩人と歴史家の関係は詩人と友人の二人の声に収斂されていった、と見ていいだろう。ロートマンは、「全体として、序文はプーシキン叙事詩の構造体系を形成する上で、注釈よりもはるかに小さな役割しか果たさなかった」と述べて、主に韻文テキストと散文の注釈の対話構造に着目しているが、「他者の声」を反映させようとした〈序文〉の役割を無視するわけにはいかない。叙事詩において序文の役割を果たした「第三の声」が詩『英雄』ではエピグラフに変容した、といえる。この詩の場合には、エピグラフと脚注と最後の日付の中に、詩人と友人の声とは異なる、別の、第三の声、作者の声を読みとることが可能であろう。勿論、詩人の声も友人の声も作者プーシキン自身の矛盾した内部の声を顕在化させたものにほかならない。その二つの声を対比させ、新たな視点からその問題を見つめ直そうとしたのが、エピグラフであり、脚注であり、日付ではなかろうか。詩の主題はそれに従って、英雄論から歴史的眞実とは何かに移り、エピグラフの「眞理とは何か」という問に収斂されていったのである。詩人と友人の対話は主題の詩的異説と歴史的異説の再構築として認められるとしたら、このエピグラフや脚注、日付はこの二つの異説に対して何を暗示しているのだろうか。

4

詩『英雄』には脚注がひとつだけついている。それは「ああ、彼（歴史家）の声が轟いた」という詩句にふされた《Mémoires de Bourrienne.》である。1837年の「同時代人」誌に掲載された詩には編集者の注がつけ加えられている。「ブリエンヌは《手記》の中で、ボナパルトがヤッファでペスト患者の病院を訪問し、彼らのうちの数名に励ましの意味で接触したという《伝説》を否定し、次のように語っている：《J'affirme, ne l'avoir pas vu toucher un pestiféré.》（ペスト患者の誰かに彼が触ったところを私は見なかったと断言する）」⁹¹ ナポレオンの秘書が著したという回想録は、文芸出版のプーシキン選集の注によれば⁹²、この手記は偽造されたもので、外交官上がりの、フランスのジャーナリストが書いたものだそうである。この手記は未見であ

るが、ムラヴィヨーヴァ女史の報告要旨によると、「ヤッファにおける事件は様々な、互いに矛盾する версия（異説）で伝えられており、ブルニン（Бурнин）の回想録はそのひとつの версия（異説）にすぎず、反駁しがたいような事実は全く含まれていない」ということである²³。女史によれば、「詩人」と「友人」の論争において対比されているのは、《空想》と《歴史的事実》ではなく、異説同士の対比である。すなわち、詩人の詩的 версия（異説）と歴史家の再構築した версия（異説）との対比ということになる。もしも友人の主張が反駁の余地の無い歴史的事実に基づいているとしたら、詩人の主張は説得力を有し得るであろうか。

真実（правда）の光明は呪われるがいい。
 その真実の光が冷ややかで、妬み深く、
 誘惑に弱い俗衆に愚かにもおもねるならば一否！
 無数の下劣な真実（истины）よりも私に尊いのは
 われわれの心を高める欺瞞（空想、虚構）である。
 英雄に心を残しておけ！もしそれがなければ
 彼は何者になるだろう？ 暴君…

詩人は友人の主張を《歴史的眞実》として認めているわけでも、否定しているわけでもない。たとえそれが歴史的事実、眞実であろうとも、もしもそれが冷ややかで、妬み深く、誘惑に弱い俗衆に愚かにもおもねるような事実ならば呪われてあれ、と呪いの言葉を浴びせているのである。彼は人々の心を高めるような《空想》をそうした下劣な眞実よりもよしとするのである。すなわち、友人がナポレオンの功績として掲げたような事績は歴史的事実であるとしても、それらは英雄の要件とはなりえない、何故ならそれは暴君にも可能な行為だからである。英雄にとって大切なことはヤッファでナポレオンが示したような行為であり、もしそれがなければ、ナポレオンは《英雄》の資格を失い、《暴君》にすぎないということになる。いかなる政治的・軍事的成功も人道的な思いやりの心を持たなければ、永遠の賞賛に値するような《英雄》とは呼べないのである。詩人はヤッファにおけるナポレオンのエピソードが事実であるか否かに関心があるのではなく、英雄にそうした行為があることを信じようとしているのである。友人はそれに対して、「安心したまえ」と語り、二人の論争を中断させる。友人はその理由については触れ

てはいない。作者が詩の最後に記した日付がその理由を推し量る材料として提供されているだけである。ポゴージンが「モスクワ報知」で書き記したように、ニコライ一世の行為は「多くの戦勝、功績、偉業」に優る行為として受け取られたのである。リストフが指摘しているように¹⁸、このポゴージンの記事には、詩『英雄』との思想的パラレルが見られる。「高潔な犠牲」と「政治的・軍事的成果、すなわち、戦勝や功績や偉業」とを比較し、前者を高く評価している点である。日付の設定は作者が友人の意見に荷担しているような印象を読者に与えないであろうか。詩人よ。安心したまえ、君が主張するような「英雄」が登場したのだ、我らの王、ニコライ一世のことである、と。

それでは、エピグラフの「真理とは何か」はどういう意味を持つのであろうか。このエピグラフは「ヨハネによる福音書」第18章38からの引用である。ピラトがイエスを尋問したときに、「わたしは真理についてあかしをするために生まれ、また、そのためにこの世にきたのである」というイエスの言葉を聞いて、ピラトがイエスに尋ねた言葉である。その言葉に対する回答は記されていない。このエピグラフについては他の作品を援用しよう。1829年にプーシキンはバラード『貧しき騎士』を書いた。それは聖母マリアに恋した貧しい騎士の物語であり、彼は、「(人の) 知恵にはおよばない／幻を胸に抱き／その面影を深く／胸に刻み」、神にもキリストにも祈らず、斉戒も守らず、こともあろうに聖母に懸想したために、死後魂を悪魔に連れ去られそうになる。しかし聖母マリアは彼を護り、その魂を天国に導いた、という内容の話である。このバラードは1835年に創作され、未完に終わった劇『騎士時代からの場面』に主人公のフ란ツが歌うロマンスとして利用された。ドストエフスキイは小説『白痴』の中にこのロマンスを引用し、この詩の解釈をアグラーヤに語らせている。ドストエフスキイは姪のソーニャ・イヴァーノヴァにあてた書簡の中で小説『白痴』の根本思想について、「しんじつ美しい人間を描くことである」と書き、そのような人物の過去の形象として、キリスト、ドン・キホーテ、ピクウィック、ジャン・ヴァルジャンの名を挙げているが、ドン・キホーテについては、「キリスト教文学における美しき人々の中で、もっとも完成されたものはドン・キホーテです。しかし、彼が美しいのは、同時に彼が滑稽である、ただそのためにほかなりません」と記している¹⁹。アグラーヤはプーシキンのロマンスについて、『貧しき騎士』はドン・キホーテと同じような人物であるけれども、ただまじめでコミカルな要素の

ないところがちがうこと、そして、第一に、この詩の中には、理想をかかげることのできる人間がはっきり描かれ、第二には、いったん理想を決めたからにはそれを信じ、それを信じたからにはそのために自分の一生を盲目的に捧げるだけの勇氣を持っているが故に、彼を尊敬していることを告げた。アグラヤはまたムイシュキン公爵に対して知恵には、大切なものとそれほどたいせつでないものと、二つの知恵があると語っている。「大切な知恵」とは、ドストエフスキイによれば、理性によって獲得されるものであり、それによっては真理は把握できないものである。これらの知性の持ち主たちは、その探求がいかに深遠であろうとも、結局は真理に到着しえず、かえってそのために破滅する運命を背負っているのである¹⁰。理性ではとらえがたい謎を白痴の主人公ムイシュキン公爵は非合理的、感覚的にとらえる。それは人の知恵（理性）にはおよばない幻を胸に抱いた貧しい騎士と相通ずるものである。すなわち、貧しき騎士もムイシュキン公爵も《美と真理》を非合理的、感覚的に把握しうる点で、共通しており、二人ともそうした《大切な知恵》の持ち主であることを示している。詩『英雄』には詩人の主張する версия（異説）と友人の主張する версия（異説）が提示されている。友人の提示した異説は歴史家の証言を援用した理性に基づく主張であり、客観的・歴史的事実を標榜したものである。しかしそれは英雄からその威光をはぎ取り、人々に抱かせている美しい夢を打ち砕くような異説である。それに対して、詩人は人々の心を高尚にするような《美しい空想》の可能性を感覚的に把握し、貧しき騎士が人の知恵・理性にはおよばない幻を胸に抱き、一生をそれに捧げたように、《美しい空想》を理想と信じているのである。つまり、詩人の異説と友人の異説は《イリュージョン》と《知識》の対立ではなく、懷疑主義・実証主義といずれの異説を信じるかという《信仰》の問題であり、人間に内在する同情と自己犠牲への潜在的 가능성을信ずるか否かという選択に移し換えられているのである¹¹。「真理とは何か」、このエピグラフはまたトルストイの小説『アンナ・カレニナ』で画家ミハイロフの描いた「ピラトの裁きの前のキリスト」の絵を想起させる。グレニーシチュフとアンナの批評を聞いたあと、画家ミハイロフは次のように考えた。「アンナは、キリストがピラトをあわれんでいる、と言った。いかにもキリストの表情の中には憐憫の表情もあったにちがいない。そこには愛とこの世ならぬ平安と、死の覚悟と言葉のむなしさを知った表情があるからである。ピラトに役人の表情があり、キリストに憐憫の表情があるのはむろんのことで、これは一方は

情欲の生活の権化であり、他は一宗教生活のそれだからである。

すべてこうしたことやほかにも多くのことがミハイロフの脳裏に閃いた¹³。ここには二つの道が暗示されている。一方は情欲（肉）の生活の道を示し、他方は宗教的（精神的）生活の道が示されている。現世的価値に生きる友人（歴史家）の生き方と来世的価値に生きる詩人の生き方はこの二つの道に相当するであろう。真理とは何か。それはこの愛とあわれみに満ちた宗教的（精神的）生活をおくることを示している。天上の、永遠の友となる道を選ぶことである。プーシキンの詩『英雄』にふされたエピグラフの意図は、懷疑主義的友人（歴史家）の異説ではなく、詩人の主張する異説、すなわち人々の心を高めるような《美しい空想》を理想として選択し、それを信じ、それを信じたならばそのために一生を捧げる勇氣を持って生きること、つまり、トルストイの説く「愛とあわれみ」の道を暗示するものなのである。

結論

この詩にはニコライ一世のモスクワ訪問の行為を「人道的・自己犠牲的」行為と評価し、ニコライ一世を賛美した作品と解釈する説¹⁴と、ニコライ一世の行為もナポレオンの《美しい空想》と同じく、見せかけだけの欺瞞（обман）にすぎないとして、この詩はニコライ一世への失望を歌った作品と解釈する説¹⁵とが見られる。しかし、筆者にはそのいずれでもないように思われる。「安心したまえ」という友人の言葉のあとの多重点、そして、作品の最後につけられた作意的日付はエピグラフを介在させるとき、作者の不同意を暗示するものではないだろうか。コレラの蔓延した首都を訪れるだけでは「地上的名声」は得られても、永遠の天上の名声は得られない。真の英雄としての名声を得るためには、真理に従って行動しなければならない。それは知性の力で把握されうるべき実在の世界ではなく、潜在能力として内在している同情やあわれみの心、つまり人間的な心を持った皇帝として行動することである。そうした行動の可能性を皇帝に求めつつ、《美しい空想》として、理想として作者は信じようとしたのではあるまいか。その期待はまもなく裏切られてしまうのだが…。

注（紙数の関係で参考引用文献の指摘にとどめ、説明を割愛する）

- (1) В. С. Листов. Из творческой истории стихотворения "Герой".

В сб.: Временник пушкинской комиссии. 1981. Л. 1985.

(2) Там же: стр.144

(3) それぞれ類似の箇所を引用しておく。

《Недвижный страж дремал на царственном пороге》(1824)

То был сей чудный муж, посланник провиденья,

Свершитель роковой безвестного веленья,

Сей всадник, перед кем склонилися цари,

Мятежной вольности наследник и убийца,

Сей хладный кровопийца,

Сей царь, исчезнувший, как сон, как тень зари.

《Евгений Онегин》(десятая глава)(1930)

Сей муж судьбы, сей странник бранный,

Пред кем унизились цари,

Сей всадник, папою венчанный,

Исчезнувший, как тень зари,

《Герой》(1830)

Всё он, всё он—пришлец сей бранный,

Пред кем смирились цари,

Сей ратник, вольностью венчанный,

Исчезнувший, как тень зари,

(4) Л. С. Сидяков. Заметки о стихотворении Пушкина "Герой". В ж: русская литература.1990.No.4

(5) Mikkelsen Gerald. Puškin's "Geroj": A Verse Dialogue on Truth. SEEJ. vol.18. No.4. 1974.

(6) Д Д Благой. Бездна пространства (О некоторых художественных приемах Пушкина). В его кн.: Душа в заветной лире Советский писатель. 1977.

(7) Ю. М. Лотман. К структуре диалогического текста в поэмах Пушкина (проблема авторских примечаний к тексту). Труды по русской и славянской филологии

IX.

- (8) 同上。
- (9) 同上。
- (10) 同上。

- (11) “Современник” T.5, 1837.
- (12) “А. С. Пушкин. Собрание сочинений в десяти томах”,
T.2. Художественная литература. 1974.
- (13) Доклад О. С. Муравьевой, посвященный “Герою”.
Русская литература 1989.No.4
- (14) 注(1) 参照。
- (15) 手紙の引用は河出書房新社版「ドストエフスキ全集」の米川正夫訳を
借用した。
- (16) 松井茂雄「《白痴》のムイシキンの形象と《貧しき騎士》との関係」
外国語外国文学研究, 1959。
- (17) 注(12)を参照。
- (18) 岩波文庫「アンナ・カレニーナ」(中村融訳) から引用。
- (19) ポゴージンの解釈
- (20) キルポーチンの解釈: В. Я. Кирпотин. Вершины. художе-
ственная литература. М. 1970.